広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部　第六三号　二〇一四　三二八－三三六

軍記物語に描かれた武士像

―『平家物語』と『太平記』における―

于　君

（受理日二〇一四年十月二日）

一　なぜ「武士像」を研究するのか

「忠」と「孝」という両概念について、日本では多くの場合、「孝」よりも「忠」が重要視され、中国では「孝」の方が重要視されてきた、と一般的に言われる。

かつて、日中両国で、「忠」と「孝」の矛盾が発生した際に、両者をどう位置づけるかについての議論があった。その中で、一般的には中国においては、「孝」は長い間に絶対的優位を保ち続けてきたと言われる。たとえば戦国時代では、家族秩序と君臣関係において「孝」は「忠」と矛盾し、両者が対抗関係を持つ場合には、「忠」が「孝」を成し遂げる手段として位置付けられ、孝より下位にあるとされる[一]。一方、日本においても、江戸時代の儒者たちの間では、「忠」と「孝」のどちらを優先するかとの議論がなされており、忠孝無二・忠孝一致も強調するが、実質的に「忠」の優位が主張されることが多い[二]。また、明治期の「忠」「孝」概念の理解のされ方を示す一例として、新渡戸稲造の『武士道』がある。氏は著書の中で、「中国では儒教が親に対する服従をもって人間第一の義務となしたに対し、日本では忠が第一位に置かれると、グリッフィスの述べたのはまったく正しい」[三]と述べている。続いて、これを説明するため、新渡戸は「忠ならんと欲すれば孝ならず、孝ならんと欲すれば忠ならず」と『大日本史』の中に描いた平重盛をとりあげ、「武士道は忠を選ぶに決して逡巡しなかった」[四]と述べる。この新渡戸の言葉は、「忠」を重んじる武士の心性を示唆するように思われる。

しかし、現在においては、新渡戸の『武士道』は実際の「武士」の思想とは関係なく、同書における「武士道」は、明治国家体制を根拠に生まれ、再構成された「武士道」であり、いわゆる日本の国民道徳を語るためのキーワードとして利用された側面がある、という指摘もなされている。では、今日使われる「武士道」とは、一体何を指すのか。

「武士道」には、実は定まった定義がなく、捉える視点によってその解釈も大きく異なる[五]。ただ、それぞれの「武士道」解釈において、いずれも武士の内的精神面に着目して述べている点で共通している。すなわち、「武士道」とは、「武士」の精神を指して言われるのである。それゆえ、現在では、日本文化・日本人を論じた代表作とされる新渡戸の『武士道』は、歴史上の実体としての「武士」と結び付けて議論する際には、批判の厳しい対象ともなる。しかしながら、長い間、ベストセラーであり続け、対西洋を意識して、日本あるいは日本人を西洋にアピールしようとした新渡戸の議論は、「武士」または「武士道」という概念を使って論じたところにこそ意味があるだろう。実際、外国においても、日本（文化）を研究する際に、「武士」または「武士道」は、しばしば取り上げられるキーワードなのである[六]。

最近では、笠谷和比古が『武士道　侍社会の文化と倫理』の中で、二〇一一年東日本大震災時の、世界中から高く評価された日本人の行動（略奪や奪い合いをしない、福島原発の作業員や自衛隊の危険を顧みない行動な

ど）をとりあげ、このような人々の精神と行動の基盤には、他国におけるそれとは異なる文化特性があるだろうと述べた上で、「このような行動や心性の背景に思いをいたす時、日本の社会と文化の歴史において大きな影響力を有し、われわれの血肉ともなっているであろう精神と行動を律する特有の文化原理、すなわち武士道というものの存在を抜きにしてこれらの問題を理解する事はできないのではないだろうか」七と述べている。これもまた、日本人／日本文化のある面を、「武士道」から考察する一例であると言えよう。

では、なぜ、新渡戸は日本人の道徳を語る際、「武士道」を語ったのか。なぜ、他国の日本人論研究の中でも「武士」が取り上げられたのか。また、なぜ現代においても、日本人・日本文化を理解する際、「武士道」が重要であると思われるのか。なぜ日本人・日本文化を考える重要な手段の一つが「武士」であり続けたのか。本研究では、これらの疑問を出発点として、日本における「武士像」の成立について考える。

二　なぜ近世以前の「武士」なのか

「武士」は、十世紀から十九世紀の長きにわたって実在しており、当然、時代によって「武士」の気質も変わってくる。その中でも本研究では、近世以前の「武士」の思想／姿を研究対象とする。それは、次の三つの理由からである。

第一に、戦闘を本分とするとされた武士にとって、近世以前は戦の多かった時代であるため、まさに戦闘者たる武士の気質を最もよく表していると考えられるからである。

第二に、平和な江戸時代に生きた「武士」の思想については、儒教的概念体系で説明する「士道」論と、戦国乱世に理想の武士像を見いだす「武士道」論、という二つの対立する「武士」に関する議論がある。この二つの武士論に対し、菅野覚明は、「儒教的な士道は、戦闘者として乱世を生き抜いた武士たちの精神を、太平の世にふさわしい人倫道徳によって説明しようとした。一方で、武士道は、乱世の武士の精神そのものを継承しようとした……両者がめざしている理想の当体は、かつて存在した優秀な武士たち自身の思想や行動にある。みずからが優れた武士となるために、かつての武士たちを手本にするという点で、武士道と士道は全く一つなのである」八と指摘する。「かつて存在した優秀な武士」とは、まさに平和な近世以前の時代（源平合戦時代、戦国乱世時代）に生きた「武士」のことを指す。すなわち近世武士と近世以前の武士の関連性から、近世の「武士」の形成を考える前に、まずは、近世以前の「武士」について考える必要があるのである。

第三に、中世武士の思想について、いまだ十分に研究がなされていないという実情があるためである。武士の思想、すなわち「武士道」と題される研究書または「武士」と関わりのある書物九を概観すると、圧倒的に近世に書かれた史料をもとに論じられたものが多く見られる一〇。一方で、中世の武士の思想については、十分に論じられていない面があるように思われる。近代以前の武士像には、まだまだ鮮明すべき点が多いのである。

三　軍記物語を研究材料とする理由

近世以前の武士を考える上での基本的な資料としては、軍記物語一一、武家家訓などが挙げられるが、本研究では、軍記物語を武士研究の材料として利用する。その理由は以下の通りである。

第一に、家訓と軍記物語の制定時期の問題についてである。家訓は時代の要請を背景として制定され、徳川幕府成立前後の慶長から寛永の四十一年間、および幕藩体制確立後の寛文から貞享の二十七年間に書かれたものが多い一二。一方で、軍記物語は平安時代末期から室町時代にかけての間に生成され、まさに戦闘者たる武士について多く記述されている時期である。

第二に、それぞれの資料のもつ性質の問題である。例えば、初期の武家家訓である「六波羅御家訓」一三を見ると、部下・仲間との交際「五　恪勤ノ若ラン及中間躰ノ者ヲバ少々ノ咎ヲバ、ヲシ、ヅメテ、スコシヲドス様ニ云テ、細々ニ勘当スベカラズ。常ニ人ヲ勘発スレバ、聞及者ノ近習ヲシタガラヌ也。惣テハヂアル者ニ恥ヲ与ル事停止スベ□。同ク仕フ□ノイカニ少トモ、恥アル者ノ□ヲバ□ナダラカニスベシ。召仕ヘバトテ恥アル□ノノ子　イトシナキ者ヘシゲニイワバ□思ベシ。□ツミ知ルヤウニ語ヲカケ云フベ□。漏レ聞テ□悦思也」一四とあり、他にも会食、飲酒、文芸、礼儀作法など具体的な生活の多方面にわたって詳細に書かれている。これらのことが家訓に書き記されたという事実は、逆に実際の戦闘場面または日常社会において、それらが欠如していたことを示している。またこれらはおおむね、箇条書き且つ

説教的であり、一個の人格を持った武士の生き生きとした姿そのものが見えてこない。他方、軍記物語の中で、武士は一個の人格を持った戦闘者として描かれている。実際にそれぞれ心情を持って戦っており、その姿は時に家訓に記されたあるべき姿を逸脱するものでもある。

第三に、生成過程の問題である。武家の家訓は、父祖や家長が家の存続・繁栄を期して、子孫・一族あるいは家臣に宛てて書き残した訓戒である。この点で、それはある個別な武家内部という限られた空間に生まれたものである。一方、軍記物語は、津田左右吉が述べるように、物語の作者が権力と権力によって動かされる人間とを離れて広い民衆の見地から自由な判断をし[一五]、かつ、種々の作者によって複雑な思想背景、過酷な戦環境、多種多様な人間関係において複眼的に描かれており、多くの受容層を持つ。この点で、軍記物語に描かれた武士の思想は、より多面的であると考えられるだろう。

上記の理由から、戦闘者としての武士の姿、実際の戦の場面における生き生きとした姿を、多くの人々に読まれた物語文学から読みとることを、本研究の目的としたい。

四　『平家物語』と『太平記』

軍記物語の中でも、ほぼ同時代に世に出、「四部の合戦状」と称されていた『保元物語』『平治物語』『平家物語』『承久記』の内、本研究では、その発生以来最も広く読み継がれ、明治から国民的叙事詩にまで発展してきた『平家物語』と『太平記』を研究材料とする。十三世紀中頃（一二四〇年頃）に成立したとされる『平家物語』[一六]は、主に平家一門の盛衰を描いたものである。そして今日の形に出来上がった『平家物語』は、その生成過程において、種々の作者が想定され、数多くの異本を持っている。この書物が広く読まれて、人々の共感を引き起こすのは、より広範な当時の人々の思想を包み込んで作られたからであろう。そのため、武士についての多様な思想もその中から読み取れる可能性があると考えられる。これは、中世前期のほかの軍記物語の遠く及ばないところと言えよう。

そして、『平家物語』成立の約百三十年後に、数十年にわたる南北朝の争乱を描いた『太平記』が生まれる。『太平記』は『平家物語』ほど数多くの異本を持たないが、同じく複数の作者によって長期間にわたって出来上がった物語である。長く続いた戦乱における武士の、多種多様な姿が描かれていると考えられる。

また、『平家物語』は、琵琶法師による語りによって広められ、『太平記』も「太平記読み」によって語られ普及する[一七]。両作品はともに「語り」を通じて、広範囲に伝えられ、多くの人々に親しまれてきた。さらに、すでに指摘されるように、『太平記』には『平家物語』を踏まえたと思われる類似の話などが多く見られる。他方、両作品には共通点がある一方、成立した時代の隔たりや社会・思想背景なども無視できず、武士そのものの変容を見るために、両作品における武士像の比較研究を行うことも必要である。

五　両作品中の武士はいかに論じられてきたか

『平家物語』は、明治時代以降、いわば国民的叙事詩として読みなおされる過程で、その時々の社会状況に応じて、作中の武士が、「英雄」または「運命」といったキーワードで語られた。例えば、平清盛・木曾義仲は英雄として捉えられた[一八]。また、平重盛、平知盛、斎藤別当実盛は運命の予言者と捉えられた。『太平記』についても同様のことが言える。戦時下における「忠君愛国」精神を養うため、楠木正成・正行父子がその典型として、政治的に利用されたのはその一例である。大津雄一は『『平家物語』の再誕　作られた国民叙事詩』の中で、物語内部の小さな「声」が、外部の要求に答えて大きく増幅され、ロマンティックにファナティックに語られたことは、物語の持つ可能性を抑圧する営為であった、と指摘する。この指摘は、「一つの声」で物語を読むことが、物語の中の武士を極めて偏った解釈に導くことを示唆する。それは、物語に描かれた武士の多様な姿を見失う危険に陥る。

何らかのキーワードにたよって、両軍記物語の中の武士を解釈する研究は、近年はあまり見られなくなった。両作品について、国文学においては、主に成立論、諸本論、古態論、主題論、構想論、語りなどの視点から研究が進められており、武士の精神・気質について両物語の中から探るような研究はあまり見かけない。他方、一九八〇年代以降、両軍記物に対しては、むしろ政治思想、倫理思想、社会思想的な立場からの研究が多く見られるようになった。ただ、これらの研究は、『平家物語』や『太平記』のような軍記物語とあわせて、その他の武士道書[一九]からの引用がなされている。

ともあれ、『平家物語』及び『太平記』に描かれた武士が、それら研究書の中でどのように扱われてきたのか、主として近年の研究を中心に、個々の研究書中、両物語から引用材料として考察された部分に焦点を当てて整理しておく。

倫理思想史の相良亨は、『武士道』二〇において、倫理学の立場から武士という主体の内面にかかわる「武士的なるもの」や武士の気質、そして、その精神構造・姿勢を解明している。その中で、『平家物語』の実盛に代表される武士をとりあげ、「名を重んじ、恥を知る」武士の気質について論じている。相良は、このような武士の気質は、時に敵味方をこえて、主従の場をもはなれて、単に一個の武士としてあったと指摘する。また、軍記物語にしばしば見られる「坂東武者の習、大将軍の前にては、親死に子討るれども顧みず、弥が上にも死に重なつて戦ふとぞ聞く」二一のような台詞をとりあげ、それは武士の「名のみを惜しむ」気質と関わるとする。

武士道を研究対象とする日本思想史学者小澤富夫は、『武士　行動の美学』（玉川大学出版部、一九九四年）の中で、武士の行動と意識がいかに変容していったのかについて、源平時代の武士から戦国乱世、江戸時代末期までの武士の生き方・死に方に注目して論じている。小澤は著書の中で、『平家物語』の中にも描かれる、佐藤嗣信・義仲や今井兼平・義経などの武士をとりあげ、「死の後の名こそ惜けれ」という武士の意識を説明する。また、敦盛・忠度のような武士の出立の晴れ姿及び実盛の立派な最期には、死の潔さを覚悟した者のみがもつ行動の美意識があると指摘する。そして、『太平記』にも村上彦四郎義光のような死をいさぎよさとする武士が数多く登場すると述べる。

「日本人は個人存在を表明するための自前の文化の源泉」二二を、中世におけるサムライの発祥から戦国・江戸時代に至までの過程の中に発見しようとした、社会学者池上英子『名誉と順応　サムライ精神の歴史社会学』二三（森本醇訳、NTT出版、二〇〇〇年）は、名誉を重んじる武士の歴史社会学的検討を行っている。池上は、『平家物語』などの戦記文学中の武士は、例えば、一番乗りという手柄のため競争相手である梶原源太景季を騙した佐々木四郎高綱のように、公正な戦いのルールを破ることがあっても、強い戦士としての「名」をあげる、という当時の人々の考えがあったため、作品の中では批判されない、と述べている。また、今井兼平の例をあげ、彼の名乗る行為及び切腹に近い自殺は、「名誉」と関わるとする。さらに、『太平記』の武士になると、切腹という名誉ある自殺の方法が制度化されるようになったと述べる。ただ、池上はこの著書で、武士の「名誉」意識そのものを問題とするより、むしろ歴史・社会の変動において武士の「名誉」を生む原因の解明に力点を置いている。例えば、『平家物語』や『太平記』といった戦記文学の段階における武士の「名誉」意識は、池上において、武士の生活基盤である「家」・主従関係・合戦の形式との関連で説明される。

中世軍記物語の専門家である栃木孝惟は、『軍記と武士の世界』（吉川弘文館、二〇〇一年）の中で、『平家物語』の武士に関して、主にその死と生の場面に着目して言及している。栃木はまず、武士の「家」との関連において、清経と維盛の死を考察している。具体的に、清経の死は、一門の運命に離反し、「家」のあるべき秩序に背いた自己の恣意と資質に殉じた個人的な死であって、すなわち武門の家の解体を意味する、と述べている。一方、維盛の死は、一門という大きな「家」および妻子を含めた小さな「家」の両方を離脱し、現世の遠い彼方に夢想を寄せた旅立ちであるとする。また、生者の世界の延長に死後の世界の存在を共に信じた平重盛と重衡をとりあげ、中世の生死観の一端を読み解くのである二四。

徳川時代における武士の行動の規範であった武士道について論じた歴史学者笠谷和比古の『武士道　その名誉の掟』（教育出版社、二〇〇一年）二五では、『平家物語』や『太平記』などの軍記物にある「弓矢取る身の習い」や「弓矢の道」などに表現される、中世武士の行動規範に触れている。それは戦場において武士がわきまえておくべき作法であり名誉の観念に他ならないと指摘する。たとえば、戦で武勲・戦功を立てることを第一の名誉とする。

松尾剛次『太平記　鎮魂と救済の史書』（中公新書、二〇〇一年）は、『太平記』を戦乱での戦没者への鎮魂を強調する史書ととらえるため、その中の武士について、楠木正成・正行父子、新田義貞・義興父子を怨霊となったものと捉えて論じている。一方、足利尊氏・直義・直冬を怨霊を鎮魂した側と捉える。

サムライが強い精神性を持てた理由に答えようとし、サムライの思想・行動を基礎づけたのが近世の「世間」だと考える日本近世史研究の山本博文が、『武士と世間　なぜ死に急ぐのか』（中央公論新社、二〇〇三年）の中で、『平家物語』や『太平記』の武士（実盛、名和長重）を取り上げるのは、中世武

士の名誉心と死の覚悟を研究の主題としたためである[二六]。

中世文学を研究する佐伯真一は、『戦場の精神史　武士道という幻影』（NHKブックス、二〇〇四年）で『平家物語』の「越中前司最期」や『太平記』の「阿保・秋山河原軍の事」など数多くのだまし討ちのシーンを分析し、新渡戸をはじめとする武士道論が唱える武士の潔癖な倫理・道徳の虚像を暴いている。佐伯は『平家物語』や『太平記』などの武士の行動の記述を中心に検討することで、勇敢で立派な振る舞いをした敵を助ける、功名争い・自己顕示のための名乗り・一騎打ち・組み打ち、奇襲・夜討ち・だまし討ちなど、謀略と虚偽を肯定する戦場独特の倫理感覚を明らかにしている。

倫理学の菅野覚明は『武士道の逆襲』（講談社現代新書、二〇〇四年）の中で、『葉隠』的武士道と、儒教的士道が共に目指している理想の当体としての「本来の武士道」を課題としている。その中で、武士道の根源である「実力」の項をとりあげ、「名」は実力の表現であると見る。この「名」について、特に『平家物語』の「実盛の最期」の場面をとりあげ、実盛の最期のさまは、名を惜しむ武士のあるべき姿の典型であると述べる。また、主君と死生を共にする家来の究極のあるべき姿として、今井兼平を取り上げて説明する。

「武士道の歴史的変容」（武士道の思想史）という視点から捉える研究に、小澤富夫の『歴史としての武士道』（ぺりかん社、二〇〇五年）がある。小澤は、源氏武士の死の場面と対比しながら、平忠度・敦盛・維盛・清経ら平家の武士の最期をとりあげ、これらの武士による武門平家の解体をもたらす末路の情景を、「盛者必衰」の描写として捉えるのではなく、武士道の「道」における文武兼備の貴族的武士道の終焉とみることが可能である、と新たな観点を提示する。また、佐藤嗣信などをとりあげ、死後の名を惜しむ鎌倉武士道を指摘する。一方、『太平記』の武士について、楠木正成の最期の念仏（同じ人間界に生まれて朝敵を討って本懐を遂げる）をとりあげ、『平家物語』の平家の武将の最期に見られた「往生念仏」とは違った「南北朝武士道」を提示する。

中世軍記物語を中心とする文学研究者、日下力には、『保元物語』『平治物語』『平家物語』『承久記』をとりあげ、これらの作品に共有する性格と本質について論じた『いくさ物語の世界―中世軍記文学を読む』（岩波書店、二〇〇八年）がある。その中で、特に「平家物語」について、日下は西洋の叙事詩と比較しながら、生死に関わる根源的な苦悩を表現した熊谷直実、指揮官としての魅力と悲劇を招く資質の両方を兼備する義経、息子知章を死なせたため煩悶する知盛、起死回生のヒーローである教経、子のために悩み苦しむ心弱き宗盛、固い主従愛の木曾義仲と今井兼平、運命を自覚する知盛、おのれの誇りのために行動する実盛・妹尾兼康・那須与一などを挙げ、いくさ物語の人々の多様な生き方、死に方を伝える日本の軍記文学の独特の世界を読者に提示する。

以上挙げてきた、きわめてさまざまな視点からなされた研究を概観すると、佐伯、相良、山本、小澤、笠谷、菅野は、それぞれの著書の中で、「武士道」との関連において、武士の戦場倫理・気質・精神・意識・行動規範について考察しているといえる。そして、それを名（名誉）を重んじ、死の覚悟を持つ武士の特徴を両軍記物語から検証している。「名」という表現こそ使わないが、日下力も「おのれの誇りのために」行動する実盛・妹尾兼康・那須与一について触れる。また、池上英子も『平家物語』や『太平記』の武士の「名誉」を重んじる精神を指摘している。栃木は作品の武士を、時代背景・構想・主題に合わせて論じ、武士を含めた中世の人々の死生観も読み解いている。そうした中で、松尾剛次の『太平記　鎮魂と救済の史書』は、多少特別なものとして目立つ研究である。戦後、「平家物語ほど運命という問題をとりあげた古典も少ないだろう」[二七]と述べた石母田正が、『平家物語』を運命を語る書と捉えて、平重盛・平知盛・実盛を運命の予言者と捉えたのも松尾と同様の、『平家物語』あるいは『太平記』をいかなる作品と捉えるかによる、武士に対する見方である。ただ、これらの諸研究において、『平家物語』と比べ、『太平記』からの引用が少ないことも指摘しておくべきだろう。

六　本研究の視点と方法

かつて、『平家物語』も『太平記』も、政治的に利用されたことがある。そして、両作品に描かれた武士も、その時々の社会状況に応じて、限られた面だけで捉えられた場合がある。平清盛を例にとって言えば、江戸時代の『大日本史』の中では、意のままに殺生を行い、勝手に福原へ都を遷して摂関や公卿を苦しめた奸雄だとされたが、明治になり、ロマン主義の影響によって、また「英雄」だとされるようになる。このような現象が生じた理由の一つに、物語に描かれた本来の武士を読む側の所在する当時の社会・思想状況に合わ

せて見ているところがあるのではないだろうか。同じテキストを読んでも、読み方によって、その中に描かれた武士に対する解釈も異なってくるのである。

前述した多くの研究者たちは、それぞれ研究の立場が違うにも関わらず、武士の思想のある側面を、物語に取材して論じ、明治期あるいは戦時中のように「日本精神」・「英雄」などといったファナティックまたはロマンティックな言葉によってではなく、実証的にその本質を明らかにしようとしている点で、ともに評価できるものである。ところで、前述したように、それらの著書で『平家物語』や『太平記』をとりあげる際に、多くの著者が「名」（名誉）を問題としている。しかし、武士の思想・精神は決して「名」だけに留まらない。たとえば、平重盛は『平家物語』の中で、「忠臣孝子」として描かれている。『太平記』の中の楠木正成も「忠臣」とされる。「忠」や「孝」といった概念は武士と無縁のものだろうか。

津田左右吉が、『平家物語』などの戦記ものにこういった言葉が現れているのは、その書き手となったと思われる人物が儒学や仏典の文字上の知識を持った僧徒であるためだと指摘していることはよく知られている。しかし、「凡そは此のおとど、文章うるはしうして、心に忠を存じ、才芸すぐれて、詞に徳を兼ね給へり」（巻第三「医師問答」）とあるように、理想的な人間像として平重盛が語りだされた事実は、武士を含めた当時のより広範な民衆にとって、何が重要視されたかを示唆する。また、平重盛以外に、『平家物語』の中のほかの武士について語る時、あまり「忠」や「孝」といった概念を使わない点も注目に値する。一方、『平家物語』と比べ、『太平記』においては「忠」や「孝」が多用されている。儒教的な考えとしての「忠」と「孝」は突然、『平家物語』が成立した時代に現われたのではない。両軍記物に現れる「忠」と「孝」を、いかなる場面や文脈においてそれらの言葉が使用されたのかに留意し、武士の気質について考える必要があるだろう。

前に、同じ物語の中の武士に対する各時代の違う評価は、その時々の社会・思想状況の影響下に成り立った捉えかただと述べた。しかし、それは当時の時代思想だけの問題ではない。ここから見えてくるのは、物語の中に描かれた武士をなぜ当時の時代思想と重ね合わせて議論する事が出来たのか、その背後に潜む問題である。『平家物語』の本文に、平清盛について、摂関や公卿を苦しめた記述があるからこそ、江戸時代では奸雄だとされたのである。また、清盛の最期の時の言葉に従来の因果応報を信じないという古い秩序を打破する要素が含まれているからこそ、明治では「英雄」だとされたのである。『太平記』の楠木正成についても、彼の「忠臣」的側面と「悪党」的側面の両方を兼備する記述が見られるからこそ、ある時期には「忠臣」、ある時期には「悪党」とされるのである。以上から、後代における武士のイメージ形成に大きな影響を与えた理由を、物語における武士に対する多様な叙述そのものに求めることも可能だろう。

本研究では、両軍記物語の叙述（描き方・語り）を中心に考察するが、その中でも、叙述に実在する「名」「忠」「孝」「恩」といった生の言葉（概念）から、武士の姿を読み解くことを目的とする。ただ、先に断っておかなくてはならないのは、本研究が目指すのは、あくまでも軍記物語の中に描かれた武士の理想的な諸相そのものを明らかに摘出することである。もちろん、これこそが武士の本当の思想であるといった主張するわけではない。両作品の中で、もともとどのような武士像が描き出されているのかを明らかにすることによって、現代の私たちの「武士」についての様々な理解が形成された、その起源を探ることの一歩としたいと考えるのである二八。

【注】

一　尾崎雄二郎編『中国文化史大事典』大修館書店、二〇一三年、三二八―三二九、参照。

二　子安宣邦編『日本思想史辞典』ぺりかん社、二〇〇一年、「忠孝論」の項を参照。

三　もともと英文で書かれ、一八九九年にアメリカで刊行された。本稿の引用は、新渡戸稲造著・矢内原忠雄訳『武士道』（岩波文庫、一九三八年、八五頁）による。

四　前掲書『武士道』、八八頁。

五　佐伯真一は『戦場の精神史　武士道という幻影』（NHKブックス、二〇〇四年、一九二頁）の中で、「「武士道」とは、ある論者にとっては日本固有の武士の思想のことであり、ある論者にとっては儒教の日本的変容のことであり、ある論者にとっては自立した個人を基礎とした主従関係のことであり、ある論者にとっては主君と惚れ合う男と男の関係のことであ

り、ある論者にとっては支配階級としての責任感のことであり、ある論者にとっては虚飾を排する潔い姿勢のことであり、ある論者にとっては敵に対して正々堂々たる戦いを挑む倫理観のことであり、ある論者にとっては鎧の色目などにも気を配る美意識のことである」と述べ、「武士道」解釈の多様性を示している。後文にあげる菅野覚明は『武士道の逆襲』の中で、武士道は第一義に戦闘者の思想だ、と指摘する（二〇頁）。山本博文は、『武士道の名著』（中公新書、二〇一三年）の中で、武士道は、武士に求められた厳しい道徳律を言う言葉である、と言う（二頁）。これらの「武士道」解釈の共通点としては、共に武士の内的精神面に着目して述べるところである。本研究では、後に述べるように、物語に描かれる武士の姿を明らかにすることを目指すため、より網羅的な言葉として、「武士像」を使う。

六　その一つに、例えば、モーリス・パンゲ『自死の日本史』（筑摩書房、一九八六年）がある。

七　笠谷和比古『武士道　侍社会の文化と倫理』NTT出版、二〇一四年。

八　菅野覚明『武士道の逆襲』、講談社現代新書、二〇〇四年、三〇頁。

九　前掲書『戦場の精神史　武士道という幻影』、相良亨『武士道』（初版は塙新書、一九八六年）、小澤富夫『武士　行動の美学』（玉川大学出版部、一九九四年）、笠谷和比古『武士道　その名誉の掟』（教育出版社、二〇〇一年）、菅野覚明『武士道の逆襲』（講談社現代新書、二〇〇四年）、小澤富夫『歴史としての武士道』（ぺりかん社、二〇〇五年）、アレキサンダー・ベネット『武士の精神とその歩み―武士道の社会思想史的考察―』（思文閣出版、二〇〇九年）、山本博文『武士道の名著』（中央公論新社、二〇〇三年）などが挙げられる。

一〇　理由として、「武士道」という言葉自体がほとんど中世の文献に出て来ないことが挙げられる。しかし、中世武士の「思想」は、「武士道」という言葉にあるのではない。この言葉を使わないまま、戦いの中に自ずと現われてくる。これも本研究の課題の一つである。

一一　軍記物・戦記物語・戦記文学などともいう。武士と合戦は、その定義をなす時の不可欠な二要素である。

一二　小澤富夫『武家家訓・遺訓集成』（増補改訂版、ぺりかん社、二〇〇三年）の「序」を参照。

一三　北条重時が一家の主人として、嫡男である北条長時に宛てた教訓書、軍記ものの『平家物語』とほぼ同じ成立時期である。

一四　前掲書『武家家訓・遺訓集成』、二二頁。

一五　津田左右吉『文学に現はれたる我が国民思想の研究』（三）岩波書店、一九七七年（初出は一九一七年）、六三―六四頁、参照。

一六　今日多く読まれるテキストは、一三七一年に死去した琵琶法師の覚一が、弟子たちに伝授した覚一本を底本にしたものである。本研究も、「東京大学国語研究室所蔵の『平家物語』（旧高野辰之氏所蔵。通称、高野本、覚一別本）を用い、覚一系の諸本および元和七年（一六二一）板本（元和版）屋代本、真字熱田本、正節本などを参照」した、新編日本古典文学全集『平家物語①／②』（小学館、一九九四年）を使用する。

一七　石毛忠編『日本思想史辞典』出川出版社、二〇〇九年、二七五頁の「軍記物語」の項を参照。

一八　以上は、大津雄一『『平家物語』の再誕　作られた国民叙事詩』（NHK出版、二〇一三年）、及び石母田正『平家物語』（岩波書店、一九五七年）を参照。

一九　ここでいう武士道書とは、江戸時代の『甲陽軍艦』、『葉隠』、『武道初心集』のような書物群を指す。

二〇　本稿は二〇一〇年、講談社学術文庫版を参照。

二一　ここでの引用について、相良は『保元物語』から引くが、前掲『平家物語①』にも、「いくさは又、親もうたれよ子もうたれよ、死ぬれば乗りこえ乗りこえたたかふ候」と似たような台詞が見られる。また、『太平記』にもこれと類似する語りが見られる。

二二　森本醇訳・池上英子著『名誉と順応　サムライ精神の歴史社会学』NTT出版、二〇〇〇年、四頁、参照。

二三　本書は、欧米の日本に対する謎（国民に集団主義の考え方と現状維持の態度を何よりも重んじて、個人主義と大胆な革新は軽んずるように奨励している社会が、工業化と企業経営の分野でどうしてあれほどの成功をおさめることができるのか）に答えようとする試みでもある。すなわち、日本の精神文化を武士の文化的発展の分析を通して解明する書だと理解してもいい（本書の「はじめに」を参照）。

二四　それ以外に、栃木は、『平家物語』の中のストーリー展開に沿って、義仲と義経の人間像についても観察した。本書では、武士以外に、貴族や、

武士の妻女、建礼門院、安徳天皇なども扱われ、また作品論をも展開し、軍記物語の面白さと武士の多様な世界を読者に見せてくれる。

二五　本書において、笠谷は『葉隠』『武道初心集』といった思想としての武士道書もとりあげるが、武士の日常行動の中でもろもろの問題に遭遇した際の、武士として正当だとされる応対など、いわゆる行動形態としての武士道について、個々の事件をめぐる断片的事実の積み重ねを通して論じている。

二六　このような武士の「名を惜しむ」心理は、武士社会の中で要請される、と山本は述べる（山本博文『武士と世間　なぜ死に急ぐのか』中央公論新社、二〇〇三年、六八―六九頁）を参照。

二七　石母田正『平家物語』岩波書店、一九五七年、九頁。

二八　「武士」にはもともと、ある現実の姿を有しているが、そのイメージは時代によって異なる。場合によって、作品の中の語り（あるいは、描き方）によって作られる「武士像」が出現する。吉川英治『宮本武蔵』がその典型である。

（主任指導教員　中村春作）

軍記物語に描かれた武士像
―『平家物語』と『太平記』における ―

The Samurai Image in Gunki Monogatari
― *Heike monogatari* and *Taiheiki* ―

Yu Jun

Abstract: To think about why Samurai is an important way to recognize Japanese or Japanese culture. I will make a study about the thought of Samurai in Gunki monogatari. While, with so many works in Gunki monogatari, *Heike monogatari* and *Taiheiki* are the most popular which were read by the widely people in Japan. In recent years, there are many studies of Samurai in *Heike monogatari* and *Taiheiki* by an ideological situation. And, the most of them are associated with the honor of Samurai. But, except the honor, there is also some other temperaments about Samurai, such as, Tyu, Kou, On. In fact, there are so much description about Samurai by used the words Tyu/Kou/On in *Heikei monogatari* or *taiheiki*. In my study, I will try to analyse the meaning of Honor/Tyu/Kou/On, and how they were be accepted by Samurai.

Key words: Gunki monogatari, samurai image, *Heike monogatari*, *Taiheiki*
キーワード：軍記物語，武士像，平家物語，太平記